

トレードマークの蝶ネクタイ

それは他の誰もがしないから...

海外生活が長い先生が、そもそも外国に憧れたのはいつごろからですか？

中村：小学生の頃からシャーロック・ホームズが好きでよく読んでいました。そんな影響もあったのかも知れませんが、イギリスに行ってみたくて思っていました。もっとも当時の世の中は何でもアメリカという時代でしたから、アメリカもいい、とにかく外国に行ってみたくて思っていたわけです。大学を卒業し、丸紅に入社。折りしも、社内でのアメリカ法務研修生に応募。当初は「法律で仕事をやる気はなかった」のですが（笑）結果としてミシガン大学のロースクールに学んだわけです。約2年半の留學生活を送り帰国。その頃は各企業で法務部門設置のブームで、丸紅でもこれに着手。私は「国際法務」部門に所属することになり、そこでの業務が始まりました。それが1976（昭51）年です。その後、1990年から約6年間ほどロンドンに滞在し、リーガルマネジャーとして勤務して、帰国したわけです。

8年半に及ぶ2カ国の外国生活から、先生ご自身が一番強く感じられた点は？

中村：そうですね。物事に対して各国・各人によってそれぞれ異なった見方・考え方があるのだということでしょう。「答えは決して一つじゃない」。つまり、同じ問題に対しても解決の仕方が違うという点が面白かったですね。中でも6年間のロンドン駐在時代には独りで法務の仕事を担当しておりましたので、仕事上で色々な国の弁護士などを通じて、他国の文化を知ることができたことが良かったと感じています。

29年間のサラリーマン生活から、大学教育の現場へ一変・転身された動機は？

中村：英国から帰国後、しばらくして友人から同志社大学大学院の非常勤講師を依頼され、「英文契約研究」という科目を4年間担当しました。この時に

「今の若い人達にこういったことのノウハウを伝授するのも面白いなあ、いや必要だ」と感じました。加えて、イギリスで独りで法律に携っていると、全て自分で答えを出さなきゃならないし、本も読まなきゃならなかった。その一方で色々原稿も書いた訳ですが、それが結構面白かったし、何冊か本も出していました。こうしたことが一つのキッカケでしょうか。もう一つは、会社という組織は（基本的には）歳を増せば位が上がる（？）わけで、帰国後にはそれなりの職責に着いたのですが、社内での業務は国際法務・取引の生の現場での業務というより、人事などの管理業務に追われる日々が変わりつつありました。取引・契約に直接携わっていた頃とは異なり、そのような生活に疑問を持つというか、つまらなく感じるようになりました。結局、私は現場が好きなのです。そうしたことが理由で、教育の現場に転身したわけです。

小樽商科大学と小樽での生活の印象などをお聞かせ願えれば...

中村：私は東京の大学ではなく、地方の大学での生活を希望していましたので、小樽商科大学には大変満足しています。「国際取引法」という科目は、地方の大学にこそ求められており、そのノウハウが必要とされているのではと思っていました。東京には専門家が沢山います。そんな折に、たまたま小樽商科大学での採用人事を知り応募したのです。ここでは私のすべき事が沢山あります。学外的にも関係者の方々とともに国際取引関係の研究会を行っています。今は「北海道のグローバル化を目指して、5年、10年先のために種を蒔くべき重要な時期」にあると考えています。今春、本学で開学したビジネススクール（アントレプレナーシップ専攻）は、そのために人材を育て



なかむら ひでお
中村 秀雄 教授

大学院ビジネススクール所属

1972年 3月	神戸大学法学部卒業
4月	丸紅株式会社入社
1975年12月	米国ミシガン大学法科大学院修士課程修了
1990年 4月	丸紅英国会社 リーガルマネージャー
1996年 4月	丸紅株式会社法務部国際法務第一課長
1997年 4月	同志社大学大学院法学研究科 「英文契約研究」担当（非常勤講師）
2001年 3月	丸紅株式会社退社
4月	小樽商科大学商学部教授
2004年 4月	小樽商科大学大学院商学研究科 アントレプレナーシップ専攻教授

るところです。小樽の街の印象ですが、山と海とに恵まれた素晴らしいところだと感じています。私も家族も満足しております。对学生観は「素直な学生が多い」と思います。素直な器は社会に出て伸びます。その一方で「外向的ではないなあ」とも思いますね。

中村先生の授業の特徴は何ですか？

中村：昨年度までは、本学の特徴でもある「実学」中心のゼミでした。すべて学生主導で、実際に他国と取引契約を結び、ある製品を開発・販売するといった具合で、これまでブックバンドや就活手帳（就職活動手帳をさす）を手掛けてきました。学生が自ら生きた学習をということ。今年からは大学院でこれを継続させた形で進めていきたいと思っております。

では終わりに、学内外でよく知られている、先生のトレードマーク（？）とも言うべき「蝶ネクタイ」に関してですが、一体いつごろから、そして何本ほどお持ちですか？

中村：もう20年近くになるでしょうか。でも「よく知られている」というのは、他の誰もがしないからですよ。本数は20本ぐらいいかなあ。ちなみに1本4,000円程度のものですが（笑）



研究室に、年代もののイギリスの契約書を数点所蔵している。写真は1857年（安政4年）に締結されたパブの賃貸契約書。



ゼミの学生が企画・開発し、中国に製造を依頼し商品化した商大マーク入りブックバンド。